

小島文庫目錄

高知大学附属図書館

題字
高知大学長 関田英里



小島 祐馬 博士

服馬肩也陸陸也橫則車前可也陸陸也制所以引車也蓋天
 也治白金以液灌潮際也續之制也 北極至之球
 正義曰經兩陳皆為駮馬設之故箋中用也備出正入之意言所以
 禁正駮馬也駮在軌前橫木槩軌故知垂軸上謂陰板軸也制言
 液續則是在環相接故云白金飾續制之環 傳文苟至日
 馬非 正義曰苟者車上之稱用皮為之言文苟則有文線故知
 帛皮也劉熙釋名云文苟車中所坐也用虎皮有文線是也暢亦為
 長故為長較言長於大車之較也色之青里者名為基馬名為
 騏知其色佳其文也釋言云馬後右之白驪左馬較光云後右
 之白驪左之白馬昂然則左之白者謂後左之也釋言又云駮上皆
 白惟馬郭瓌曰馬駮上皆白為惟馬後左脚白者直名馬昂意亦
 同也 箋言我至五德 正義曰言我釋詁又駮義云君子之德於
 玉為溫潤而澤仁也須容以栗智也廉而不剛義也密之而隨

水內故言順礼未溫道來迎之未溫謂未至水也
 以未濟言之應以伊人為知礼之故善
 傳順礼未濟道來迎之 正義曰之本
 傳晴乾 正義曰露云在陽不
 也故言露晴謂露盡物乾此篇上
 謂未乾為霜與彼並故箋云未晴未為霜
 正義曰釋水云水水草文為消謂水草文除之
 觀廉之在山岸消且水岸故云水廉
 且消小者曰涘小流曰坂
 此山大也

「毛詩正義」殘簡

「五經正義」の一つである「毛詩正義」(唐孔穎達等奉敕撰)の殘簡で、秦風編「小戎」と「兼葭」の一部。唐代の寫本ではないかと推測される。小島博士祕笈のもの。

序

高知県が生んだ中国思想史の碩学故小島祐馬博士が、主として大正初期から昭和十年代後半にかけての三十余年の間に、博搜精選して系統的に収集された貴重な蔵書の集成「小島文庫」が、高知大学附属図書館に収納されたのは昭和五十六年十二月から翌新春にかけてであった。以来五年の歳月を閲している。

「小島文庫」は漢籍二二、五八六冊、和書四、三二八冊、洋書一、六八五冊、都合二八、五九九冊より成る。博士が中国思想史を核に、広く中国学研究に関する基本的文献を、和漢洋にわたって視野広く体系的に集められたものが大部分であるが、フランス社会経済思想史上の重要著作群なども含まれている。それらの文献及び集成としての「文庫」の価値の高さは博士の抜群の見識を示すものである。

いま、それらの分類整理と目録作成の事業が成就し、ここに待望の『小島文庫目録』が上梓されることとなった。本学にとって、また学界のために、まことに慶賀に耐えない。これによって本「文庫」が、本学の研究者はもとより、広く学界に積極的に活用され、博士が望んでおられた中国学研究の発展に大きく寄与貢献することを切に期待するものである。

「小島文庫」の本学への收藏からこの目録出版までには、実に多くの方々のご努力とご援助をいただいている。まず、当時の学長山岡亮一名誉教授のご熱意と、それに応えられた博士の嗣子小島懋氏のご厚意をあげなければならぬ。さらに、博士の逝去後十五年間、毎年何度か来高され、文庫の整理・目録作成を続けてこられた博士門下の重澤俊郎京都大学名誉教授のご努力も銘記されるべきである。また片岡一郎氏以降の歴代図書館長や、分類整理・目録作成などに当られた本学の教官と図書館職員の各位、その他多くの方々のご尽力があった。それらの方々

に、本学を代表して深甚の感謝の念を捧げるものである。

昭和六十二年三月

高知大学長

関田英里

序

小島文庫とは、故小島祐馬^{おじま}京都大学名誉教授の旧蔵にかかわる、和漢洋にわたるシナ(中国)学中心のコレクションであります。小島博士のご専門は中国思想史にありますが、その研究活動は人文社会科学の広範囲な領域に及んでおり、同時にまた、一貫して近代社会科学の理論と精神を基調としておられるのであります。

いま少しく蔵書内容に触れてみますと、漢籍における、片寄りのない貴重な基本的文献の収集がある一方では、洋書における、フランス支那学および社会経済思想等の特殊な文献の収集があり、両者相俟ってこのコレクションの特徴をなしているのであります。

昭和五十七年三月、総数三万冊に垂んとするその膨大な蔵書のすべてが、「中国社会思想史」の名称で、文部省外国図書大型コレクションの予算により、高知大学附属図書館の所蔵する所となりました。

もともと小島博士は高知県出身の碩学であり、その蔵書が地元高知大学の所蔵に帰したことは何等異存はないかと思われませんが、その地元への誘致、招来はかならずしも平坦な道ではなかったのであります。すなわち、この蔵書は長く博士秘笈のものとされてきましたが、知る人ぞ知るで東洋学を中心とする人文科学系の学究にはかねてより垂涎的であり、他大学からも熱い視線を浴びておりましたので、その招致には実に多くの方々の御尽力を要したのであります。元高知大学長山岡亮一(以下敬称略)、前学長故西澤弘順、現学長関田英里をはじめ、当時の片岡一郎より東辻保和、山中二男、野町幸雄に至る歴代図書館長、また当時の事務局長福井悌次郎、会計課長牧野孝三郎、図書館事務長門田久典その他諸々の方々に至るまで、まことに数多くの諸先生、職員の方々の御熱意と御尽力に依るものであると同時に、小島家御遺族の深い御理解と御懇情により初めて可能となったものであります。

更に特筆すべきは、博士の愛弟子にあたる京都大学名誉教授重澤俊郎先生が、博士ご逝去の後たびたび高知を訪れ

て、精力的に蔵書の整理に当たられたことであります。先生は膨大な蔵書の一点一点について綿密なカードを作り、目録の作成に力を尽されました。今日のこの目録の基礎は、実に先生の手によって築きあげられたものであります。

そもそも、目録編纂の事業は何にもまして地道な労作であります。それは語り得べくして語り得ない煩瑣な労苦の集積であります。またその成就是、多くの先達先学の、営々孜々として築かれた諸目録類を待つて初めてなし得ることでもあります。本目録においても、漢籍はもとより洋書におけるフランスシノロジーの古典等は、何れも容易には分類整理され難いものであります。それは分類や書誌記述の正確を期するばかりでなく、片や利用者のための十二分な配慮を必要といたします。僅かなレイアウトの良し悪しすらも、検索の便に少なからぬ影響を及ぼすことは自明の理であります。更に、唐本、和本の類はいかに良い保存状態でありましても、地道な補修の作業はこれを免かれないのであります。目録の編纂には直接間接を問わず、多くの方々の労苦を煩わしました。特に、寒暑を厭わず長期にわたって直接この編集に携われた、山田英雄（以下敬称略）、澤崎久和（現福井大学）、金子修一（現山梨大学）、片山剛、武内房司、松田清（以上人文学部）、窪添慶文（教育学部）、高尾泰（附属図書館）の諸先生、職員の方々の献身的な御努力に対し、衷心より謝意を捧げるものであります。更にまた東京大学東洋文化研究所教授田仲一成先生、同附属東洋学文献センター畦浦美矢子事務官には懇切な御指導御助言を賜わりました。ここに紙面を借りて深く謝意を表する次第であります。

本目録の受入より刊行に至るまでの五年の歳月は、これを待望するあまり荏苒久しきにわたったかに思われますが、僅少なる予算人員を以ってしては、これはむしろ迅速に成就したと申すべきであります。ここに本目録の上梓に当たり、広く全国関係学究各位の共同利用に資することを念願するとともに、謹んで本目録を小島博士の御霊前に捧げる次第であります。

昭和六十二年三月

高知大学附属図書館長

小松 剛

おしますけま
小島祐馬博士略年譜

明治一四年（一八八一）二月三日

高知県吾川郡春野村弘岡上一二一三番地に茂太郎の長男として誕生、高知県立第一中学校、第五高等学校を経て

四〇年 七月 京都帝国大学法科大学卒業 卒業後しばらく中国に遊ぶ

四一年 五月 深瀬正壽（ます）子と結婚

四五年 七月 京都帝国大学文科大学哲学科（支那哲学史専攻）卒業

大正 元年 九月 京都府立第一中学校嘱託

二年 一月 長女素子誕生（鈴木成高氏夫人）

七年 九月 同志社大学法学部教授

九年 四月 京都帝国大学経済学部講師 東洋経済思想史を講ず

五月 長男懋誕生（高知県立農業大学校定年退職）

一〇年 二月 第三高等学校講師

一一年 八月 京都帝国大学文学部助教授

一四年 一〇月 フランスへ留学

昭和 三年 四月 フランス留学より帰国

六年 三月 京都帝国大学文学部教授 支那哲学史講座を担

任

六月 文学博士の学位を受く

学位請求論文題目は「支那古代社会の研究」

一一年 一〇月 京都帝国大学文学部長

一三年 七月 帝国大学総長任命権問題の京大代表委員

一四年 八月 京都帝国大学人文科学研究所長を兼務

一六年 一二月 停年により依願退職 これより郷里に居住

一七年 一〇月 京都帝国大学名誉教授

二一年 二月 正壽子夫人逝世

二四年 一月 日本学士院会員

二五年 一二月 中島美子と結婚

四〇年 四月 勲二等瑞宝章を授けらる

四一年（一九六六）一月一〇日

高知市西内病院に入院 胆嚢破裂による腹膜炎

と診断

同 一八日 午前十一時二五分逝世

同 一九日 従三位に昇叙せらる

同 二〇日 午後四時自宅裏山の祖塋に葬る

法名 龍昌院徳翁義祐居士

小島祐馬博士著作目録

単行本

- 古代支那研究 昭和十八年二月 弘文堂
- 中江兆民（アテネ文庫五〇） 昭和二十四年三月 弘文堂
- 中国の革命思想（アテネ新書八） 昭和二十五年三月 弘文堂
- 中国共産党（アテネ文庫一一三） 昭和二十五年七月 弘文堂
- 社会と革命―人間と社会と歴史の眞の形成について― 昭和二十九年六月 宇田政治経済研究所
- 中国の政治思想 ハーバート・燕京・同志社（東方文化講座第一輯） 昭和三十一年七月 東方文化講座委員会
- 社会思想史における「孟子」（カルピス文化叢書三） 昭和四十二年六月 三島海雲
- 中国の革命思想附中国共産党（改版本・筑摩叢書八九） 昭和四十二年九月 筑摩書房
- 中国の社会思想 昭和四十二年十一月 筑摩書房
- 中国思想史 昭和四十三年十月 創文社
- 古代中国研究（改版本） 昭和四十三年十一月 筑摩書房

論文

太宰春臺 同文館経済大辞書六卷二五一― 大正三年七月（河上肇

と連名

- 東洋の経済思想 同文館経済大辞書六卷二八八九 大正三年七月
- 藤田幽谷 同文館経済大辞書七卷三四三四 大正四年十月
- 帆足萬里 同文館経済大辞書八卷三五五六 大正四年十一月
- 本多利明 同文館経済大辞書八卷三七三五 大正四年十一月
- 松平定信 同文館経済大辞書八卷三七五六 大正四年十一月
- 三浦梅園 同文館経済大辞書八卷三七七八 大正四年十一月
- 本居宣長 同文館経済大辞書八卷三九一三 大正四年十一月
- 支那経済思想の出発点（儒家及び道家の欲望論） 経済論叢四卷三
号・五号 大正六年三月・五月
- 廖平の学 芸文八卷五号 大正六年五月
- Utilityの訳語に就いて 経済論叢四卷六号 大正六年六月
- 墨子の経済思想 経済論叢五卷四号・六号 大正六年十月・十二月
- 譚嗣同の「仁学」 芸文八卷十一号 大正六年十一月
- 黄宗羲の政治経済思想 経済論叢七卷一号・二号 大正七年七月・
八月
- 王夫之の経済思想 経済論叢七卷三号 大正七年九月
- 司馬遷の自由放任説 政治経済学論叢一卷一号 大正八年一月
- 公羊家の理想とする大同の社会 経済論叢八卷六号 大正八年六月
- 農家者流の経済思想 経済論叢九卷三号 大正八年九月
- 藉田の礼に就いて 経済論叢九卷四号 大正八年十月
- 鄧牧の「伯牙琴」 経済論叢九卷六号 大正八年十二月
- 漢の武帝と支那歴代の財政策 東亜経済研究四卷一号・二号 大正
九年一月・四月

劉師培の学 芸文十一卷五号・七号 大正九年五月・七月
襲自珍の農宗説 経済論叢十卷六号 大正九年六月

現在支那に於ける社会上の一欠陥 経済論叢十一卷二号 大正九年

八月

清朝に於ける諸子学研究 支那学一卷一号・二号 大正九年九月・

十月

公羊家の三科九旨説に就きて 支那学 一卷一号・二号 大正九年

九月・十月

支那古来の隈田説 経済論叢十一卷四号 大正九年十月

章炳麟の「非黄」を読む 支那学一卷三号 大正九年十一月

积富 支那学一卷五号 大正十年一月

経済上より観たる「尚書」の贖刑 支那学一卷六号 大正十年二月

春秋時代と貨幣経済 支那学一卷七号・八号 大正十年三月・四月

「抱朴子」と道家思想 支那学一卷九号 大正十年五月

「尚書」に見えたる五刑 支那学一卷十号 大正十年六月

公羊家の観たる「史記」 支那学一卷十一号 大正十年七月

四存学会の顔李学提倡 支那学二卷一号 大正十年九月

載書を通して観たる春秋時代 支那学二卷二号 大正十年十月

儒家と革命思想 支那学二卷三号・四号 大正十年十一月・十二月

費密の遺書 支那学二卷六号 大正十一年二月

易に見はれたる階級思想 支那学二卷八号 大正十一年四月

六変せる廖平の学説 支那学二卷九号 大正十一年五月

論語季氏篇首章の本文に就いて 支那学 二卷十号 大正十一年六

月

法家の理想とする弱民政治 支那学二卷十二号 大正十一年八月

左伝引経考証 支那学 三卷一号・二号・六号 大正十一年十月・

十一月・十二年八月

王船山の経済説に就いて 支那学三卷三号 大正十一年十二月

猪飼敬所の易説数則 支那学三卷四号 大正十二年一月

公羊家の文化階段説 哲学研究 八卷二册・八十三号 大正十二年

二月

新鄭県に於ける周代古器物の発見 支那学三卷七号 大正十二年十

二月

「詩」を通して観たる周代の経済状態 支那学三卷七号・八号 大

正十二年十二月・十三年七月

支那に於ける産業並に経済制度の沿革 支那経済通説第十三篇 大

正十三年十一月

殷代の産業に就いて 支那学三卷十号 大正十四年二月

支那の無政府と儒家思想 我等七卷三号 大正十四年三月

奴隸より出でたる支那の官吏 我等七卷七号 大正十四年七月

清初の王学者唐鑄萬 高瀬博士
還暦記念 支那学論叢 昭和三年十二月

巴黎国立
図書館蔵 敦煌遺書所見録 支那学 五卷四号、六卷一・二・三・四号、

七卷一・二・三号、八卷一号 昭和四年十二月、七年一・四・

七、十二月、八年五月、九年二月・七月、十年十月

支那文字の訓詁に於ける矛盾の統一 朝永博士
還暦記念 哲学論文集 昭和六年

四月

支那の学問の固定性と漢以後の社会 東亜経済研究十六卷一号 昭

和七年一月

湖南先生の「燕山楚水」 支那学七卷三号 昭和九年七月

分野説と古代支那人の信仰 東方学報京都第六冊 昭和十一年二月

原商 東亜経済研究 二十卷三号・二十週年紀念号 昭和十一年八

月

社会経済思想（支那思想） 岩波 講座東洋思潮第十八回 昭和十一年十

一月

支那に於ける刑罰の起源に就いて 東方学報京都第十二冊第二分冊

昭和十六年九月

支那古代の祭祀 岩波 講座倫理学第十五冊 昭和十六年十二月

日本の儒教 弘文堂世界史講座第四卷 昭和十九年五月

李卓吾と「六経皆史」 支那学十二卷五号 昭和二十二年八月

中国の倫理思想 筑摩書房講座現代倫理第十卷 昭和三十三年十月

敦煌出現の胡笳十八拍 中国文学報第十三号 昭和三十五年十月

中江兆民の学問と文章 人文学報第十三号 昭和三十五年十一月

孔孟の思想と漢唐の儒教 東洋文化第七号 昭和三十六年八月

翻 刻 書

輟軒語・勸学篇鈔 張之洞著（漢学研究叢書） 大正四年十二月 集文
小島祐点 （第一篇）

堂発行

経学歴史 皮錫瑞著（漢学研究叢書） 大正六年六月 集文堂発行
小島祐点 （第二篇）

沙州諸子廿六種（高瀬博士還暦紀念事業の一） 昭和四年二月

弘文堂発行

経解入門 江藩著 昭和五年七月 弘文堂発行

読書指南 市野迷庵著 昭和十年六月 弘文堂発行

〔東方学〕第六十輯より転載〕

凡例

本目録の構成は左記の通りである。

- 一、漢籍の部 二、五二三点 二二、五八六冊 付書名索引
- 二、和書の部 一、九七一点 四、三二八冊 付書名索引、
著者名索引、和雑誌目録
- 三、洋書の部 一、二三〇点 一、六八五冊 付著者名索引

一、漢籍の部

一、漢籍の部は、分類目録と書名索引とからなる。

一、漢籍としての収録範囲には、日本において覆刻した漢籍、いわゆる和刻本漢籍をも含めた。ただし日本人の手になる注釈書は、日本人の著作とみなして漢籍から除外した。ただこの場合でも、原文に句読点を施したにすぎないものや、注であっても頭注、傍注の類で原文の形が崩れない程度のもは漢籍に収めた。この間の区分については、故長澤規矩也氏の基準（「和刻本漢籍分類目録」、「漢籍整理法」に記載）によった。

一、分類は四部分類法に則り、「京都大學人文科學研究所漢籍分類目録」に準拠した。従って同目録中、小島文庫に欠けている類、属の項目についてはこれを欠番としたが、一方子部釋家類には、「東北大學所藏和漢書古典分類目録」に準拠して、属の項目を新たに付加した。

一、叢書の子目は分出せず、これを書名索引に委ねた。

一、新学部の分類は、日本十進分類表（NDC）第7版によった。

二、和書の部

一、和書の部は、分類目録、書名・著者名索引、和雑誌目録とからなる。

一、分類は、日本十進分類表（NDC）第7版によった。旧字体の漢字は、二、三の例外を除き、新字体に改めた。

一、書名、著者名の読みは、ローマ字読み（訓令式）とした。

一、出版事項中、東京および自明の出版地の記載はこれを省略した。

一、出版事項中、「写」は写本、「和」は和綴本の略である。

一、排列は、分類目録では同一分類番号（100区分または1000区分）内の書名のアルファベット順とした。また書名、著者名索引では訓令式アルファベット順とし、字順排列とした。

三、洋書の部

一、洋書の部は、分類目録と著者名索引とからなる。

一、分類は、日本十進分類表（NDC）第7版によった。

一、分類目録の排列は、同一分類番号（100区分または1000区分）内の標目（著者名または書名）順とした。